

〔研究ノート〕

# 0歳児の食事場面の行為に関する研究

—保育者の視点に着目して—

川 中 義 博  
Yoshihiro Kawanaka

大阪総合保育大学大学院  
児童保育研究科 児童保育専攻

本研究では、保育所に在籍する生後9か月の3名の子どもが『食べる』という行為に至るために示した「食べたいという思いの表出」と「食べたくないという思いの表出」についての、保育者の認識を明らかにすることを目的として調査を行った。その結果、6個のカテゴリとサブカテゴリが18個生成され、合計25個の特徴が見られた。

〈口を開ける姿〉や〈咀嚼・嚥下する姿〉、〈アイコンタクト〉のカテゴリでは、子どもが保育者の援助を受け入れるタイミングの重要性について挙げられた。子どもが食材に対して興味を示しているときや受け入れる態勢を整えることができていない場合、今は食べるタイミングではないという意味が口を閉じて示される姿は、「食べたくないという思いの表出」として見られた。また、援助した保育者和其他の保育者1名は、子どもと目線を合わせながら関わり合うことに着目していた。自分の思いを表情や言葉で示す姿については、「食べたいという思いの表出」と「食べたくないという思いの表出」の両方に見られた。〈食具の取り扱い〉のカテゴリでは、子どもが自ら食具を手取ることにに対して「食べたいという思いの表出」だと捉えつつも、保育者によって着目する姿はそれぞれの視点があった。そして、子どもが主体的に食事を進めるための成長段階として、「使える」「使えない」に関らず食具に触れる機会を設けることが重要だと考えられた。

キーワード：乳児保育、離乳食、表出、保育者の視点、食事援助

## I 問題と目的

### 1. はじめに

現在保育の場で実際に行われている保育方法を改善していくためには、実践者が意欲的にかかわり、乳児保育がより良い方向へと変わって行くことのできる研究方法を現場と考え、成果のある研究を行うことが課題である（塩谷、2020）。さらに、様々な特徴を持つすべての子どもたちの発達を保障するという意味でも保育の質を維持・向上していくことが必要であり、保育者が乳児と日常的やりとりの自然さを保ちつつ、それを乳児の学びの瞬間として捉え直し、かかわりの質を高めていくための研修が必要である（野澤ら、2017）。大方（2023）は、「乳児保育の実践構造は、『何を育てる時期なのか』、『保育者はどのような働きかけが必要なのか』という課題意識に基づいて『どのような視点（ねらい）から乳児保育を行えばよいのか』を整理する必要がある」と述べており、乳児保育における保育者の、子どもへの関わり方や

子ども理解に関して専門知を積み重ねることが重要だと言える。

2004年に刊行された『楽しく食べる子どもに～食からはじまる健やかガイド～』において、授乳期・離乳期には安心と安らぎの中で、離乳食を食べる経験を通して、食欲や食べる意欲という一生を通じての食べることの基礎を作ることが示されている。さらに、離乳食を通して、少しずつ食べ物に親しみながら咀嚼と嚥下を体験していき、おいしく食べた満足感への共感を受けながら、食べる意欲を育むことも記されている。2017年に改定された『保育所保育指針』には、健康な心と体を育てるためには望ましい食習慣の形成が重要であることを踏まえ、離乳食が完了期へと徐々に移行する中で、様々な食品に慣れるようにするとともに、和やかな雰囲気の中で食べる喜びや楽しさを味わい、進んで食べようとする気持ちが育つようにすることが、身体的発達に関する視点である「健やかに伸び伸びと育つ」の内容の取扱いとして記載されている。つまり、一生を通じての食べることの基礎を作る、0歳児の食事場面においては、保育士等が一人一人に丁寧に関わり、子どもと保育者等の感情が共有されるような状況の下、子どもの食べることへ向かう気持ちが促されていくことが大切だと言える（厚

生労働省、2018)。

0歳の子どもの食事場面についての研究として根津(2010)は、離乳食の援助場面においても保育者が子どもの行為をどのように解釈し、かかわるかということが、子どもが自ら食べることに向かう「主体性」の生成を左右するはずだと述べている。その上で、『離乳食介助』は子どもの『主導性』が発揮されるような『援助』として、重要な教育的かかわりとなる可能性を孕んでいるものの、保育者による子どもの行為の解釈によっては、その『主導性』の発揮を抑圧するものとなる危険性があることを指摘している(根津、2009)。また、遠藤ら(2018)は、保育士養成課程の学生を対象として、「援助され食べる側」「食べることを援助する側」といった子ども・援助者双方の立場を体感的に経験するEating-Feeding相互模擬演習を行っていた。その中で、食べることへの経験の度合いが大人とは異なる子ども、特に離乳期の子どもに援助をする際には、子どもの側に立ち、大人にとっては自動化されている行為について、段階を踏んで子どもの摂食機能をイメージし、その発達に応じた援助を意識する必要があることを述べている。さらに遠藤ら(2019)は、8～11か月児の食事場面における4組の子ども－保育者間のやりとりの分析を通して、言語的調整・身体的調整の2つの視点から保育者それぞれの援助特性を描き出していた。その中で、子どもの行動や表情による表出、〈子ども－保育者〉をめぐる相互作用の観点からの分析が課題だと述べている。淀川ら(2020)は、食事場面における「子どもの心地よさ」を観点として、保育者の援助や環境構成について専門知を研究する中で、いつも同じ保育士が普段から形成された信頼関係の元、子ども一人ひとりにしっかりと向き合い、応答的・共感的関わりを行うことが心地よさに影響していたことを述べている。さらに、食事場面における子どもの心地よさについては、保育者個人単位でそれぞれの価値観によって食事場面における保育の在り方が異なる可能性や、個々の認識がどのような要因と関連しているかについて、検討することを課題としている。続いて淀川ら(2022)は、子どもと保育士が入園後に関係性を築きながら、子ども自身も発達する中で、保育士がその子の特徴をどのように捉え、その子の食事場面での心地よさを支えるためにどのように援助や環境構成をしていたかについて、その個別具体的なありようと保育士の受け止めや対応のプロセスについても描出していた。ここでは、子どもの自主性の表れやペースは一人ひとり異なるものであり、食事場面での「子どもの心地よさ」を支える／脅かす要因も違うことが示唆されている。

このように、生きる力や意欲を育む乳児の食事場面に

おける「子どもの心地よさ」は、関係性の構築された保育者から、主体性を尊重された子どもの立場に立つ援助を受けながら、関わり合い・営みの中で育まれるものであり、『食べる』という行為を安心して進めることを前提としたものであると考えられる。その上で、0歳の子どもの『食べる』という行為自体に至るための、子どもの行動や表情による表出から捉えなおすことが必要であり、保育者の認識について検討していくことが重要である。

## 2. 研究の目的

『授乳・離乳の支援ガイド(2019)』には、離乳後期である生後9か月頃から始まる手づかみ食べについて、食べ物に触ったり、握ったりすることで、その固さや触感を体感し、食べ物への関心につながり、自ら食べようとする行動につながるということが記載されている。つまり、手づかみ食べが始まる前の生後9か月頃に、自ら食べたいという思いを表出する姿が特に見られると考えられる。そのため、安心して『食べる』という心地よい行為に至るために示した生後9か月の子どもの表出を捉えることで、「自ら食べたい」という意欲に関する子ども理解を深めることができると言える。

そこで本研究では、生後9か月の子どもの『食べる』という行為に至るため示した表出についての、保育者の認識を明らかにすることを目的として調査を行う。方法としては、手づかみ食べに至る前の、保育所に在籍する生後9か月の子ども3名の「食べたいという思いの表出」と「食べたくないという思いの表出」について、保育者が捉えた視点から検討する。

## II 研究方法

### 1. 用語の定義

本研究における定義として、【表出】とは「ある場面で生じた認知過程や情動過程などの心的過程に伴って、外部に表れた身体的・運動的・生理的な身体現象」を指している(水野、2019)。また、以降の文中において使用する【9か月】は、月齢9か月を表す。

### 2. 調査対象者と調査期間

調査対象施設は大阪府内公立Pこども園であり、調査期間は202X年7月から202X年10月までである。Pこども園の職員は47名おり、幼保連携型認定こども園教育・保育要領(2017)が改訂された2017年以後に0歳児を担任していた保育者を調査対象者とした。該当した保育者は11名であり、今回調査の協力を得ることがで

きたのはその中の10名であった。調査対象者の「保育経験年数」と「0歳児クラスを担任した回数」、「直近に受け持った年度」の内訳は表1に記している。

### 3. 映像について

本研究は、筆者が先に行った研究で使った映像を分析対象とする(川中、2023)。「撮影の手続き」の詳細については先の研究を参照していただき、ここでは概要について記す。

#### (1) 撮影の手続き

映像の撮影は、202X-3年7月から202X-3年11月の期間、Pこども園へ移管する前的大阪府内公立Q保育所で行った。202X-3年度の0歳児クラスには9名が在籍しており、9か月の時期において観察できた3名を抽出している。0歳児クラスは4名の担任保育者が在籍しており、0歳児クラス担任経験歴が3回目のJ保育者を、援助する保育者として選出している。

0歳児クラス保育室内で月に1~3回の頻度でビデオカメラを用いて動画を撮影し、音声を記録した。ビデオカメラは、食事前から食事終了までの対象児と保育者とのやりとりの全容が見えるように、1m離れた場所で定点固定した。撮影を行った件数は、X児4件、Y児4件、Z児6件で、合計14件(総時間2時間48分1秒)である。対象児の9か月にあたる事例は、X児1件、Y児2件、Z児2件で、合計5件(総時間54分31秒)である。食事開始から終了まで機嫌良く食べ進めることのできていた事例を1件ずつ抽出して、計3件(総時間37分11秒)を調査対象回とする。

離乳食を開始した時期から毎週対象児の3名は、うどんを1回、果物を3回食べていた。3名共に、うどんは残食がほぼないメニューであり、果物に関しては特にバナナを好む姿が見られていた。そこで、主食のうどんと

デザートバナナが食べ慣れた食材であると判断し、同じ献立内容の事例を対象としている。なおQ保育所では、子どもの成長する様子に合わせて離乳食の段階を進めており、献立に出てくる食材を家庭で一口食べてから、保育所でも食べ始めることとなっていた。

全事例において、対象児とJ保育者は一対一で食事を進めていた。X児とY児はチェアと呼ばれるテーブル付きの椅子を使用しながら保育者と対面に座っており、Z児は保育者の膝の上で食事を進めていた。食事を進める上で、食具を乗せた食事用トレイ(33cm×23.5cm)を置くために、「食台」と呼ばれる30cm四方の補助台を全事例で使用していた。

#### (2) 撮影対象児と援助を行った保育者との食事場面での関係性

Q保育所では食事場面において、保育者が特定の子どもに対して継続して援助を行う担当制を取り入れていた。担当保育者の不在時に、他の保育者が援助を行う機会は月に1~2回であった。食事時間以外では、食事の担当児かどうかを分け隔てることなく生活しており、日々の遊び場面においても、子どもと保育者は一緒に関わり合っていた。本研究の調査対象である3名の子どもは、第2子以降に生まれており、同じ202X-3年4月に入園していた。

X児(202X-4年8月生、女児、第4子)が保育所で離乳食を食べ始めたのは8か月頃であり、本研究の事例はその1か月後であった。観察を行う1か月前に担当保育者が不在の時はなかったため、J保育者から初めて援助を受けたのは、今回観察した事例であった。離乳食開始時は食事に対する意欲が見られにくかったが、1か月経過すると食事を進めることに対して喜びを感じる姿が見られ始めたこと、担当保育者から申し送りが行われていた。

表1 調査対象者の概要

調査対象者	保育経験年数	0歳児クラスを担任した回数	直近に受け持った年度
A保育者	30年	7回	2023年度
B保育者	25年	5回	2023年度
C保育者	7年	1回	2023年度
D保育者	13年	1回	2022年度
E保育者	31年	8回	2021年度
F保育者	11年	1回	2021年度
G保育者	35年	5回	2019年度
H保育者	34年	7回	2018年度
I保育者	21年	6回	2018年度
J保育者	18年	3回	202X-3年度



Y児（202X-4年11月生、女児、第2子）は、7か月頃から保育所で離乳食を食べ始めた。担当保育者から援助を受けなかった機会は、8か月時に2回あり、そのうちの1回はJ保育者からの援助であった。本研究の事例は、Y児がJ保育者から援助を受ける2回目の食事場面であった。Y児は、担当保育者が食材を口へ運ぼうとすると積極的に口を開けていると申し送りがあるほど、食事を進めることに嬉しさを感じていた。

Z児（202X-3年1月生、女児、第3子）は、J保育者が離乳食を開始した7か月時から継続的に援助を行っていた担当児であった。Z児がJ保育者以外の保育者から援助を受けた機会は、8か月時に2回あった。Z児は授乳を受ける姿勢やミルクの温度に好みが見られていたが、離乳食を食べ始めるとどの食材に対しても積極的に口を開けて援助を受け入れる姿を見せていた。また、十分にお腹を空かせた状態でなければ授乳や食事を進めることを拒んでいたため、食事開始時間の調整に対する配慮が必要であった。

普段のX児とY児の食事時間に、J保育者は他の担当児の食事援助を隣のスペースで行っていた。そのためJ保育者は、担当保育者がどのように2名の食事を進めていたのかについて観察する機会が多かった。また、月に一度に行っていた0歳児のクラス会議において、保育者間で子どもの食べ方や食べ進め方を検討する場を設けていた。

#### 4. 調査方法

##### （1）調査シートの作成手順

子どもは食事を開始した時間帯では意欲的に向かうことができるが、一定時間経過すると食事以外の物事に対しても興味が向き始めるため、子どもの様子に変化が起これと考えられる。そこで、子どもが初めに食材を口にする直前を開始時間とし、それからの5分間の映像を見返しながら、子どもの行動や音声を記した調査シートを作成した。

調査シートの項目は、【番号】が各事例の【子どもの行為】の通し番号、【経過時間】は子どもの行動や音声が見られたときの時間を示している。【子どもの行為】は、子どもの行動や音声を記している。【子どものどういった姿が「食いたい」という思いを示していたのか】は、調査対象者が子どもの「食いたいという思いの表出」を捉えた理由を記述する欄である。なお、調査シートの【子どもの行為】は、X児が111個、Y児が114個、Z児107個で、合計332個あった。

##### （2）調査シートの記入

3名の子どもの各5分ずつの映像を、10名の調査対象者に視聴してもらった。次に、事前配布した、調査シートの【子どもの行為】と対応するように、【子どものどういった姿が「食いたい」という気持ちを示していたのか】について記述方式で記入してもらった。会議や他の研修等があったため対象者全員を集めて行うことが難しく、映像を視聴する時間と調査シートに記入する時間は、保育業務の合間に各自で取り組んでいただいた。

##### （3）カテゴリの作成と特徴の分析

9か月の子どもの『食べる』という行為に至るために示した「食いたいという思いの表出」を分析テーマとした。調査対象者が記した記述内容を、分析テーマに照らして繰り返し読み込む中で、9か月の子どもの「食いたいという思いの表出」の視点から分析し、類似する内容を集めてカテゴリを作成した。次に、各カテゴリに分類した調査対象者の共通する記述内容を要約しながら整理し、その意味を表すサブカテゴリを作成した。データの解釈にあたっては、対象者にとってどのような意味があるのかを重視し、解釈が恣意的にならないよう、常に他の記述内容との比較を行った。分類を行う際には、Pこども園における、外部の大学准教授による3歳未満児保育に関する園内研修を今年度受講し、現在0歳児・1歳児・2歳児をそれぞれ担任している調査対象者3名（保育経験年数30年以上）に協力していただいた。そこから、サブカテゴリの中で見られた記述内容を基にして、各カテゴリについての特徴を検討した。

##### （4）10名の調査対象者が記した「食いたいという思いの表出」の分析

カテゴリおよびサブカテゴリそれぞれに分類した中の、10名それぞれの調査対象者が1名のみ記していた記述内容について、どのような視点で9か月の子どもの「食いたいという思いの表出」を捉えていたのかについて検討した。

##### （5）援助した調査対象者が記した「食べたくないという思いの表出」の分析

3名の子どもに対して援助を行っていたJ保育者には、他の9名の調査対象者が行った調査シートへの記入に加えて、3事例全ての映像を観てから、「食べたくないという表出」が見られた理由についても記入をいただいた。記述された内容について、3名の子どもの「食いたいという表出」がそれぞれどのように見られていたのかをテーマとして考察を行った。

## 5. 倫理的配慮について

本研究の調査については、調査対象施設の園長およびこども園の所属課の課長、調査対象者10名（映像の中の保育者を含めて）に対して口頭で趣旨を説明し、同意を得ている。映像の撮影を行った対象児の保護者へは、調査対象施設の「個人情報取り扱いに関する同意書」の中で、情報管理が保たれている教育機関との連携や施設内外の保育研究活動に必要な範囲内での利用において同意を得ている。撮影したデータについては、施設内の金庫で保管しており、保管期間を10年とする。また、対象児と調査対象者の名前はアルファベットを用いた仮名で記し、個人が特定されないよう配慮している。

## Ⅲ 結果と考察

10名の調査対象者が記述した【子どものどういった姿が「食いたい」という思いを示していたのか】の総数は、445個だった。そこから、本研究の目的である「食いたいという思いの表出」に合致しない内容について除外すると、435個が分析の対象となった。その記述を概観すると、カテゴリが6個、サブカテゴリは18個に分類することができた。1つの記述の中に複数のカテゴリに分けることのできる内容を踏まえて集計すると、246個の内容が挙げられた。表2は分類した結果を示しており、【9か月の子どもの「食いたいという思いの表出」の例文】には調査対象者が記述した内容の例文と、内容を記していた保育者の仮名を記載している。以降の文中において、〈 〉はカテゴリ名を示し、《 》はサブカテゴリ名を意味している。『 』については、特徴を示している。

### 1. 〈口を開ける姿〉について

表2において〈口を開ける姿〉は、3つのサブカテゴリで構成されている。

《食具が近付くのを、口を開けて待つ姿》においては、保育者からの援助を待たずに口を開ける姿や、保育者の援助を待つように自ら口を開けて食べに行く姿が5名の保育者に捉えられていた。これらの姿は、自分の口へ運んでもらうことについて、見通しを持つことができていたために、食材が口に入ることを待っていると言える。保育者が近付けるスプーンを見つめて口を開ける姿については、3名の記述があった。次の食材を受け入れる準備が整ったことで早く食いたいという思いになり、保育者の持つ食具を見つめていると考えられる。

《自ら食材を食べるために口を開ける姿》においては、保育者の言葉かけや口へ食材を運ぶ援助のタイミングに

合わせて、顔や体ごと前のめりになりながら口を開ける姿が捉えられていた。これらは、保育者からの援助に対して自ら積極的に受け入れようとする気持ちが表れていると言える。くり返し取り込もうとする姿については2名の保育者が記しており、タイミングが合わなかったとしても食べることに挑戦する気持ちが見られていることがわかる。

《食具が近付いて、口を開ける姿》では、保育者が近付けたタイミングに合わせて、口を開けることを記していたのは、7名の保育者であった。保育者の援助を受け入れる気持ちがあったために、口を開ける姿が見られていたと考えられる。周りの音や他児、自ら持つ食具といった食材ではないところに気持ちが向いていたものの、保育者からの援助があったことで、口を開ける姿が記されていた。他の環境に対して気持ちが向きつつも、保育者が近付ける食具に対する意識を持っているために、口を開けていることがわかる。

以上のことから、〈口を開ける姿〉は、次の3つの特徴が挙げられる。『自分の口へ入ることを見通しながら、準備するように口を開けて待つ』や、『保育者の援助を、積極的に受け入れようと口を開ける』である。さらに、『他の環境に対して気持ちが向きつつも、保育者が近付ける食具に対して意識を向けて口を開ける』も特徴である。

### 2. 〈身体的な表現〉について

表2の中で〈身体的な表現〉は、6つのサブカテゴリで構成されている。

《体を使った表現》については、自ら食具に顔を近付ける姿が6名の保育者に捉えられていた。保育者の手元を見ながら、顔を前に出す姿についても6名の保育者が記していた。食いたいという気持ちがあるために、自ら顔を食具へ近付ける姿や、姿勢を変えている様子が見られていたと考えられる。前かがみになってのぞき込む様子や、体の向きを整える姿についても記述があった。次に食べる食材が何かを知りたいという思いや、食べる準備として体の向きを自ら整える姿であることがわかる。

《手を使った表現》として、催促するようにテーブルを手でたたく姿については、5名の保育者が記していた。要求するように両手を動かしていることについて捉えていたのは、6名の保育者であった。これらは、会話で気持ちを伝えることの難しい子どもにとっての、食いたいという思いのベビーサインやボディランゲージであったと言える。2名ではあったが、保育者に触れることで、食いたいことを伝える姿も捉えていた。「食いたい」という思いに気付いてもらいたいという願いがあっ

表2 9か月の子どもの「食べたいという思いの表出」のカテゴリ表

カテゴリ	サブカテゴリ	9か月の子どもの「食べたいという思いの表出」の例文
口を開ける姿	食具が近付くのを、口を開けて待つ姿	食材が口に入るまで、大きな口を開けて待つ (A、C、D、H、J)
		保育者がスプーンを近付ける前より、前のめりになって口を開けて待つ (B、F、H、I、J)
		保育者が近付けるスプーンを見つめて、口を開けて待つ (E、H、J)
	自ら食材を食べるために口を開ける姿	タイミングを合わせて前のめりになりながら、口を開ける (A、B、D、E、H、J)
		保育者の言葉かけで次の食材を理解し、口を前に出して食べる (A、G)
		タイミングを合わせて顔を前に出して、口を開ける (D、E、H、J)
		保育者の言葉かけに合わせて、口を開ける (F、H)
		くり返し取り込もうとする (G、H)
		自ら食具をくわえようとする (A、G、H)
		保育者の手元を見ながら、自分から前のめりに口を開ける (I、J)
	食具が近付いて、口を開ける姿	保育者の顔を見ながら、嬉しい表情で口を開ける (B、F)
		タイミングに合わせて、口を開ける (A、C、D、E、G、I、J)
		自ら持つスプーンへ興味を示しつつも、口を開ける (D)
		保育者の顔を見ながら、(大きく)口を開ける (E、F、H、J)
		周りの音や他児を気にしつつも、口を開ける (D、G、H)
身体的な表現	体を使った表現	自分から食具に顔を近付ける (A、C、D、F、H、J)
		保育者の手元を見て、顔を前に出す (A、B、C、D、H、J)
		食べる準備として、両手でテーブルを持つ (B、C)
		食材のある方向に、体を向ける (C、H、I、J)
		机を押さえながら体を支えて、顔を前に出す (C)
		チェアへ前のめりに寄りかかる (B、C、D、G、J)
		自分から、早く口に入れようとする (C、E、F、H)
		食器の中の食材を、前かがみになってのぞき込む (B、E、J)
		口を開けて体を動かす (F、I、J)
		保育者の言葉かけに反応して、顔や体を前に向ける (C、I、J)
		保育者が近付けたスプーンに気づき、前を向く (J)
	手を使った表現	催促するように、テーブルをたたく (A、C、E、F、J)
		食べる際に手に力を入れている (B)
		食器を見ながら手を上げる (B、E、F、J)
		両手を広げるように動かす (C、F)
		要求するように、両手を上下に動かす (A、D、E、H、I、J)
		「早く食べたい」と、保育者を触って知らせる (F、J)
		待っていたことを伝えるように、両手を振る (A、I、J)
		保育者と目を合わせて、手をたたく (I)
	言葉を発しての表現	表情を変えながら、言葉を発して催促する (C)
		保育者に向けて、催促する言葉を発する (A、D、E、F、H、I、J)
		催促するように、叫ぶ言葉を発する (I)
	集中する姿	食事や保育者の言葉かけに集中している (H)
	期待感のある表情	保育者の顔や食材を見ながら笑顔になる (A、G、I、J)
		次の食べる食材を見て、期待する表情になる (B、G、H)
	落ち着いた状態	咳込んでいた後、落ち着いた状態になる (H)
咀嚼・嚥下する姿	嚥下をする姿	ゆっくりと嚥下する (A、F)
		保育者が持つ食器を見て、嚥下する (C)
		空腹が満たされてきつつも、ゆっくりと嚥下する (E)
		少し急いで嚥下しようとする (F)
		保育者の手元を見ながら、嚥下する (F、J)
		保育者が食具を近付けたタイミングで嚥下する (J)

咀嚼・嚥下する姿	咀嚼をする姿	次の食材を見て、咀嚼する (A、B、C、F、J)
		スプーンが口元に運ばれる前から、咀嚼して待つ (C、D、G、H、J)
		食べたい気持ちと、保育者の咀嚼を促す言葉かけがつながり、咀嚼する (G)
		嬉しそうに咀嚼をする (E、H、I)
		嚥下するのに時間を要しつつ、咀嚼する (I)
	嚥下後の期待感	嚥下したであろう後も、咀嚼するように口を動かす (C)
		嚥下したことにより、口の中の物が無くなる (H)
		嚥下した後に、自分のタイミングで食べようとする (I、J)
食具の取り扱い	子ども用スプーン の取り扱い	自ら持つスプーンの柄をくわえる (A、C)
		食材や保育者の持つスプーンが近付くと、自ら持つスプーンを口から離す (A、H、J)
		スプーンを自分で持っておく (A)
		保育者がすくった様子を見て、手元にある自分のスプーンを口に入れる (C)
		保育者の持つスプーンが近付くと、自ら持つスプーンをくわえる (C)
		自ら持つスプーンを口に運び入れる (D)
		嚥下しながら、自ら手に持つスプーンを見る (C)
		手に持ったスプーンを見ずに、食べようとする (B)
	保育者用スプーン の取り扱い	食材の乗ったスプーンに手を出す (C)
		保育者の持つスプーンに手を添える (C、D、H)
		保育者の持つスプーンに手を添えて、自ら口に運ぼうとする (A、B、C、F、G、J)
アイコンタクト	目で伝える表現	食べさせて欲しいことを訴えるように、保育者の顔や目を見る (A、C、F、G、H、J)
		安心して食べようと、保育者の顔を見て確認する (E)
		口を前に出すときに、安心できる保育者の顔を見る (E)
		食材が口に入るごとに、保育者の顔を見る (H、I)
		「この食材が好き」という表情で、食べるときに保育者の顔を見る (H、I)
		保育者の顔を見て、食べるタイミングを確認する (J)
	保育者の関わりへの 応答	言葉をかけた保育者と、目を合わせる (H、I)
食材への視線	食材への意識	咀嚼しながら、食材を見ている (B、C、F)
		嚥下した後に、次の食材を見る (A、C、J)
		食べたい食材やトレーを見る (A、C、E、H、I、J)
		スプーンが自分の口に近付くと、食材を見て確認する (A、F、H、J)
		体を前のめりにして、食材を見る (B、G)
		食べ物を探すように、テーブルや食台、トレーを見渡す (C)
		保育者から食材に目線が移る (C)
		保育者が食材の名前を発すると、食材を見る (C)
		食器の中の食材を、確認するように見る (D、E、F)
		保育者が食器を持つと、次の食材へ視線を向けて待つ (E、I)
		保育者の言葉に反応して、トレーや食器、食材を見つめる (A、I、J)
	保育者の手元への 意識	保育者が食事の用意をする手元を見る (A、F、H)
		食材をすくう保育者の手元を見つめる (A、B、C、E、F、I、J)
		保育者の持つ食器から、目を離さずにじっと見つめる (A、B、C、F、H)
		食器を持つ保育者の手元を目で追う (A、C、D、F、G)
		保育者が食器を置く手元を見る (F、I)
		保育者の持つスプーンを目で追う (F、G、I)
		保育者が手に取ろうとする食器を見る (H)
		食材が口に入った後に、食器へ目線を戻している (B)
		嚥下しながら、保育者の持つスプーンを見る (F)



たために、自然と保育者に対して触れる姿が見られていたと考えられる。

《言葉を発しての表現》においては、保育者に対して、催促するように言葉を発していることを表出であると、7名の保育者が捉えていた。気持ちを伝える言葉や叫ぶような主張というように、保育者に向けて様々な発し方をしながら、食べたい思いを9か月の子どもの言葉で伝えていることがわかる。

《期待感のある表情》では、保育者の表情を見ながら笑顔を見せている様子や、次に食べるであろう食材に対して期待する表情を示している姿を、それぞれ4名と3名の保育者が記していた。笑顔や期待感のある表情からも食べたい思いが伝わってくると、保育者が捉えていることがわかる。

以上のように、〈身体的な表現〉は、6つの特徴が挙げられる。『自ら顔を食具へ近付ける』や『次に食べる食材が何かを知るために、食べる準備として体の向きを自ら整える』である。さらに、『食べたいという思いのベビーサインやボディランゲージを示す』と『保育者に対して自然と触れる』についても挙げられる。そして、『9か月の子どもの言葉で伝える』や『笑顔や期待感のある表情を見せる』である。

### 3. 〈咀嚼・嚥下する姿〉について

表2について〈咀嚼・嚥下する姿〉は、3つのサブカテゴリに分類されている。

《嚥下をする姿》については、保育者が持つ食器に気持ちを向けながら嚥下する姿が記されていた。次の食材への期待感を持ちながら、嚥下を行っている様子であることが言える。また、急いで嚥下をする姿が捉えられていることについては、次の食材を早く食べたいという思いが表れていたと言える。

《咀嚼をする姿》においては、食材を見たことで咀嚼をするという姿が、5名の保育者に捉えられていた。次の口へ運ばれるであろう食材を見たことで、その食材を食べたいという気持ちになって咀嚼をしていたと考えられる。また、次に食材を運んでもらう食具を見ながら、咀嚼をして待つ姿についても、5名の保育者が記していた。次の食材について意識が向いているために、食べる準備として咀嚼をしていたと言える。

《嚥下後の期待感》では、嚥下をしたことにより、口の中が無くなったことについて記されていた。嚥下をしたことによって、次の食材を受け入れる準備ができた姿であることがわかる。また、嚥下をしたことで、自分のタイミングで食べようとしている姿についても捉えられていた。嚥下は子ども自身が行うため、食べたいタイミ

ングを決めるという意図的な調整ができるようになってきていることがわかる。

以上のように、〈咀嚼・嚥下する姿〉の特徴については、5つ挙げられる。『次の食材への期待感を持ちながら、嚥下を行う』や『次の食材を早く食べるために、急いで嚥下をする』である。また、『次の口へ運ばれる食材に意識を向けて、食べたいという気持ちから咀嚼する』についても挙げられる。さらに、『次の食材を受け入れる準備として、嚥下する』や『嚥下をして、食べたいタイミングを決める』である。

### 4. 〈食具の取り扱い〉について

表2の中で〈食具の取り扱い〉は、2つのサブカテゴリで構成されている。

《子ども用スプーンの取り扱い》については、自分の持つ食具を口にくわえることが表出であると捉えられていた。食具が食べるためのツールであると理解しているかどうかは判断できにくい、食具を使って自分で食べ進めることに繋がる発達段階であるため、表出であると捉えることが大切だと言える。また、自分の食具を持つこと自体が、食べたい思いであるとも捉えられていた。食具を持つことで、安心感や食事に向かう気持ちを抱くことに繋がっていたと考えられている。保育者が食材をすくったときや食具を近付けた際に、自ら持つ食具をくわえる姿についての記述があった。たまたまタイミングが同じだったかもしれないが、食具を使って自分で食べている気持ちになっていたとも捉えることができる。

《保育者用スプーンの取り扱い》においては、保育者の持つ食具に手を添えて、自ら口へ運ぼうとする姿について、6名の保育者が記していた。さらには、保育者の持つ食具に手を添えること自体についても、3名の保育者が記していた。これらの様子は、保育者の持つ食具が自分の口へ運ばれることを理解している姿であり、自ら食べ進めたいという思いが見られていることが言える。食材に乗った食具に手を伸ばす姿についても記されていた。この姿から食具を使って食べることを理解していると考えられ、食具を使用しての食事を進める発達段階に至りつつあると捉えることができる。

以上のように、〈食具の取り扱い〉の特徴は、5つ挙げられる。まず、『食べるためのツールであると理解し、自分の持つ食具を口にくわえる』や『安心感や食事に向かう気持ちを抱くために、食具を持つ』である。さらに、『保育者が援助するタイミングで自ら持つ食具をくわえ、自分で食べた気持ちになる』と『自ら食べ進めるため、保育者の持つ食具に手を添える』が挙げられる。さらに、『自ら持つ食具を使って食べようとする』である。



## 5. 〈アイコンタクト〉について

表2において〈アイコンタクト〉のサブカテゴリは、2つに分類されている。

《目で伝える表現》の中では、食べたいという思いを保育者に対して目で伝える様子について、6名の保育者が記していた。9か月の子どもは上手く言葉を使って気持ちを表現することが難しいため、言葉にならない思いを視線で伝えていることがわかる。また、安心して食べるために保育者の顔を見る姿として、食べることを確認する時の様子や、口を前に出すタイミングについての内容が記されていた。これらの姿は、「この食材を食べていいよね?」という思いや、「今から食べるから見ててね」といった気持ちを、視線で伝えていると捉えることができる。

《保育者の関わりへの応答》においては、「おいしいね」という保育者の言葉かけに応えるように目を合わせる姿が、2名の保育者に捉えられていた。この姿は、「おいしい?」という保育者の言葉かけに対して、「おいしいよ。もっと食べたいな」という気持ちを視線で伝えていると考えられる。保育者の言葉かけに対する、9か月の子どもの返答であるとも捉えることができる。

以上のように〈アイコンタクト〉の特徴については、3つ挙げられる。『言葉にならない、食べたいという思いを視線で伝える』や『食べることを確認する気持ちや食べるタイミングを、視線で伝える』、『保育者の言葉かけに対して、視線で気持ちを返答する』である。

## 6. 〈食材への視線〉について

表2の中で〈食材への視線〉は、2つのサブカテゴリで構成されている。

《食材への意識》の中では、自分の食べたい食材やトレイを見つめることについて、6名の保育者が記していた。保育者が用意をしている食材ではなく、自分の食べたい食材が出てきて、その食材に対して視線を送っていたと考えられる。また、自分が次に食べる食材を確認するように食器の中を見る姿や、保育者が近付ける食具に乗った食材を見る様子が捉えられていた。「次に食べる食材は何なのかを知りたい」という意識が出てきており、その食材を確認する姿が表れていることがわかる。

《保育者の手元への意識》では、食材をすくう保育者の手元を見る様子や保育者の持つ食器から目を離さない姿、さらには保育者の持つ食器を目で追うことが、それぞれ5名の保育者に記されていた。これらは、保育者が次に口へ運ぼうと考えている食材について興味を示し、その食材を食べたい思いとして自然と視線を送っている姿であったと言える。

以上のように、〈食材への視線〉の特徴は、『自分の食べたい食材に対して視線を送る』や『次に食べる食材が入っている食器の中を確認する』、『次に口へ運ばれる食材に興味を示し、目で追う』という3つが挙げられる。

## 7. 保育者が捉えた「食べたいという思いの表出」

表2の中で、10名の調査対象者が、それぞれ各保育者のみ記していた内容について見ていく。

### (1) A 保育者が捉えた「食べたいという思いの表出」

表2の中で、〈食具の取り扱い〉の《子ども用スプーンの取り扱い》では、スプーンを自分で持っておく姿が表出であるとA保育者は捉えていた。これは、ただ食具を持っていると捉えることができるものの、食具を持つこと自体が食べたいという思いを示していると、A保育者が考えていたと言える。

### (2) B 保育者が捉えた「食べたいという思いの表出」

表2の中でB保育者は、〈身体的な表現〉の《手を使った表現》において、食べる際に手に力を入れている姿を記していた。食べようとする思いが、力の入った子どもの手に表れていると捉えていたことがわかる。〈食具の取り扱い〉の《子ども用スプーンの取り扱い》においては、手に持ったスプーンを見ずに、食べようとする様子を記していた。この姿については、子どもが自ら食具を持っているものの、保育者から援助を受ける際には意識を向けていないことを読み取っていたと言える。〈食材への視線〉の中の《保育者の手元への意識》では、食材が口に入った後に、食器へ視線を戻す様子について記していた。この姿については、食材を口に運んでもらった後であっても、すぐに次の食材に対して気持ちを向けていると考えていたことがわかる。

### (3) C 保育者が捉えた「食べたいという思いの表出」

表2においてC保育者は、〈身体的な表現〉の《体を使った表現》の中で、机を押さえながら体を支えて、顔を前に出す姿を記述していた。これは、保育者の持つ食具に顔を出したり体を倒したりするだけでは届かないため、しっかりと体を支えながら顔を前に出していることを読み取っていたと言える。《言葉を発しての表現》では、表情を変えながら言葉を発して催促する姿についても記していた。言葉を発するだけではなく、子どもが表情を変えている姿についても視点を持っていたことがわかる。

〈咀嚼・嚥下する姿〉の《嚥下をする姿》では、保育者が持つ食器を見て、嚥下する様子について記してい

た。《嚥下後の期待感》においては、嚥下したであろう後も、咀嚼するように口を動かす様子を記述していた。これらからは、保育者の持つ食器を見たことで、次の食材が用意されていることを認識して嚥下を行っている姿や、嚥下した後も口の中を空にして次の食材を食べる準備をしている様子について着目していたことがわかる。

〈食具の取り扱い〉の《子ども用スプーンの取り扱い》では、保育者がすくった様子を見て、手元にある自分のスプーンを口に入れる姿や、保育者の持つスプーンが近付くと、自ら持つスプーンをくわえる様子について記していた。これらは、食事の用意をする姿を見たときや保育者の持つ食具が近付いたことで、自らの食具をくわえる姿であるため、食材を食べることが自らの食具と繋がっていると捉えていたことがわかる。《保育者用スプーンの取り扱い》では、食材の乗ったスプーンに手を出している姿を捉えていた。食材に対する興味が出てきて、手づかみ食べが見られ始める姿であることを記していたと言える。

〈食材への視線〉の《食材への意識》では、食べ物を探るように、テーブルや食台、トレイを見渡す姿や、保育者から食事に視線が移る様子について記していた。これらは、食材に対する意識が向いているため、自然と視線を向ける姿について読み取っていたと言える。

#### (4) D 保育者が捉えた「食べたいという思いの表出」

表2の中でD保育者は、〈口を開ける姿〉の《食具が近付いて、口を開ける姿》について、自ら持つスプーンへ興味を示しつつも、口を開ける姿を記していた。自ら持つ食具に意識を持ちながらも、食べることにに対する気持ちがある姿について捉えていたことがわかる。

〈食具の取り扱い〉の《子ども用スプーンの取り扱い》の中では、自ら持つスプーンを口に運び入れる様子について記していた。保育者による援助がある前に自ら持つ食具を口にくわえることが、食べたいという思いであると捉えていたことが言える。

#### (5) E 保育者が捉えた「食べたいという思いの表出」

E保育者は表2の中で、〈咀嚼・嚥下する姿〉の《嚥下をする姿》について、空腹が満たされてきつつも、ゆっくりと嚥下する姿を記していた。食事に対して満足感を持ちながらも、もう少し食べたいという思いがあるために、ゆっくりではありつつ嚥下をしていると考えていたことがわかる。

〈アイコンタクト〉の《目で伝える表現》では、安心して食べようと、保育者の顔を見て確認する様子や、口

を前に出すときに、安心できる保育者の顔を見る姿を記していた。子どもが安心して食べ進めるためには、保育者の顔を見ることが重要であると捉えていたことがわかる。

#### (6) F 保育者が捉えた「食べたいという思いの表出」

表2についてF保育者は、〈咀嚼・嚥下する姿〉の《嚥下をする姿》において、少し急いで嚥下しようとする姿について記述していた。食べたいという思いから、子どもが自らの意思で嚥下していることを読み取っていたと言える。

〈食材への視線〉の《保育者の手元への意識》については、嚥下しながら、保育者の持つスプーンを見る様子を記していた。子どもが嚥下をしながらも、すでに次の食材が運ばれることを意識しているため、保育者の食具を見ていると考えていたことがわかる。

#### (7) G 保育者が捉えた「食べたいという思いの表出」

表2でG保育者は、〈咀嚼・嚥下する姿〉の《咀嚼をする姿》について、食べたい気持ちと保育者の咀嚼を促す言葉かけが繋がったことで、咀嚼する様子について記していた。子どもが次の食材を食べたいという思いを抱いていたために、保育者からの言葉かけをきっかけとして咀嚼する姿に繋がっていることを捉えていたと言える。

#### (8) H 保育者が捉えた「食べたいという思いの表出」

表2についてH保育者は、〈身体的な表現〉の《集中する姿》では、食事や保育者の言葉かけに集中している姿を捉えていた。食事や保育者の言葉かけに気持ちを向けることで、次に運ばれる食材を受け入れる準備を整えていると捉えていたことがわかる。《落ち着いた状態》では、咳込んでいた後、落ち着いた状態になる姿を記していた。咳込んでいた姿から落ち着いた状態になることは、安心して食事を進めることのできる態勢になることが重要だと捉えていたと言える。《嚥下後の期待感》においては、嚥下したことにより、口の中の物が無くなる姿を記述していた。嚥下をして口の中の物が無くなることで、次の食材を食べようとする気持ちとなって準備が整うことを捉えていたと言える。

〈食材への視線〉の《保育者の手元への意識》では、保育者が手に取ろうとする食器を見る姿について記していた。保育者が手に取ろうとしている食器に目を向けることが、次に口へ運ばれることを期待している姿であると考えていたことがわかる。

## (9) I 保育者が捉えた「食べたいという思いの表出」

表2でI保育者は、〈身体的な表現〉の《手を使った表現》について、保育者と目を合わせて、手をたたき様子を記していた。保育者に対する次の食材を食べたいという要求を、手をたたきことで表出していると捉えていたと言える。《言葉を発しての表現》においては、催促するように叫ぶ言葉を発する様子を記述していた。ただ言葉を発するのではなく叫ぶという表現で記しており、強く要求する子どもの言葉にならない思いを捉えていたことがわかる。

〈咀嚼・嚥下する姿〉の《咀嚼をする姿》では、嚥下するのに時間を要しつつ、咀嚼する姿について記していた。嚥下することに時間を要しているものの、まだ食べ進めたいという思いから、咀嚼を続けていると読み取っていたことが言える。

## (10) J 保育者が捉えた「食べたいという思いの表出」

J保育者は、本研究の調査対象児に対して食事援助を行っていた保育者である。ここでは、援助をしていたJ保育者が捉えた内容について、表2から述べていく。

〈身体的な表現〉の中の、《集中する姿》や《落ち着いた状態》に関する記述は見られなかった。また、〈アイコンタクト〉における《保育者の関わりへの応答》についての記述もなかった。これらのサブカテゴリに関しては、着目していない可能性がある。

〈嚥下・咀嚼する姿〉の中の、《嚥下をする姿》において、保育者が食具を近付けたタイミングで嚥下する姿について記していた。保育者が食具を近付けたタイミングに、食べたいという思いから嚥下をする姿について捉えていたと言える。つまり、援助を行っていた際に、子どもが嚥下をする姿に着目しながら食事を進めていたと考えられる。

また、〈アイコンタクト〉の《目で伝える表現》については、保育者の顔を見て、食べるタイミングを確認する様子について記していた。子どもが食材を食べる際に、保育者の目を見ている姿に着目していたことがわかる。

## (11) 10名の保育者が捉えた「食べたいという思いの表出」

このように、18個のサブカテゴリの内の14個において、それぞれの保育者が個々に捉えていた内容があった。単純に保育者が記述をしていなかった可能性があるものの、保育者個人が考える「食べたいという思いの表出」の内容については、様々な捉え方があると考えられる。〈身体的な表現〉の《言葉を発しての表現》においては、ただ言葉を発するだけではなく、子どもが表情を変えながら言葉を発している姿についても捉えられて

いたことがわかる。〈食具の取り扱い〉の《子ども用スプーンの取り扱い》では、4名の保育者がそれぞれに個々の視点で表出を捉えていた。子どもが自ら食具を手取ることに對して表出であると捉えつつも、着目する姿についてはそれぞれの視点があることがわかる。3名の子どもに援助を行っていたJ保育者については、子どもが食材を食べる際に、保育者の目を見ている姿に着目していたことがわかった。またE保育者も、子どもが安心して食べ進めるためには、保育者の顔を見ることが重要であると捉えていた。援助をしていた保育者の記述であるため、実際の食事場面で心がけていたことを示していると考えられ、子どもと保育者が視線を合わせながら関わり合うことに着目していると言える。

以上のことから、「食べたいという思いの表出」の内容については、保育者の多様な捉え方がなされており、それぞれの認識が異なると言える。〈身体的な表現〉の《言葉を発しての表現》や〈食具の取り扱い〉の《子ども用スプーンの取り扱い》、〈アイコンタクト〉の《目で伝える表現》など、同じサブカテゴリであっても、保育者が着目している姿については、それぞれ個々の視点があると言える。援助をしていた保育者が食事場面で心がけていた、子どもと保育者が視線を合わせながら関わり合うことは、他の保育者1名にも着目されている。

## 8. 3名の子どもの「食べたくないという思いの表出」

ここでは、今回3名の食事場면을援助したJ保育者が捉えた、「食べたくないという思いの表出」についての記述を考察していく。

## (1) X児の「食べたくないという思いの表出」

X児について捉えていた表出について述べる。食材が口に入ったままであったため、保育者が食具を近付けたとしても食べることができていなかった姿や、飲み込んでからすぐのタイミングで口へ運ばれたために、口を閉じている姿が見られていた。また、食べるものの、食材を喉に詰まらせる姿も記されていた。これらは、子どもが食べ進めているときに保育者が援助を行ったために口を閉じる等をして食べたくないという気持ちを示している姿や、食べたものの実際は食べ進めることのできていない場面であるため、受け入れるタイミングが合っていないことがわかる。また、食具を見たまま、口を動かして椅子からずり落ちる姿や、顔を後ろに引いたり下を向いたりする様子についての記述があった。顔を背けるように、保育者が近付けた食具から顔を逸らす姿や、体を違う方向へ向ける様子についても記されていた。これらは、保育者が食具を近付ける援助に対して、体を使って



食べたくないという思いを伝えていることがわかる。保育者が食具を近付けると、机の上を触っている姿についても記されていた。食事以外のことに気持ちが向いている姿であるとも捉えることができるが、食べることから注意を逸らしている様子であったと言える。保育者の顔を見るといった視線で訴える姿や、体を動かしながら言葉を出すという様子についても記述があった。これは、保育者に対して食べたくないという思いを、表情や言葉で伝えていることがわかる。さらに、食材を見ながら顔を後ろへ引いて口を閉じていることが記されていた。見た食材を受け入れたくないという思いがあるため、その食材から顔を遠ざけるかのようにしながら口を閉じていたと考えられる。

このようにX児が示した食べたくない思いは、『食べ進めているときに保育者が援助を行ったために、口を閉じる』や『保育者の援助を受け入れるタイミングが合わない』として表れている。また、『食具を近付ける保育者の援助に対して、体を使って思いを伝える』や『食べることから注意を逸らす姿』も見られている。そして、『保育者に対して、表情や言葉で伝える』や『顔を遠ざけて口を閉じる』についても挙げられる。

## (2) Y児の「食べたくないという思いの表出」

次に、Y児について記していた表出について述べる。まず、喉がつまったような表情を見せる姿や喉をつめたように首を振る様子が捉えられていた。これらは、喉の水分量が足りておらず、食べ進めることが難しい姿であったと言える。また、スプーンを見て言葉を発する姿についても記されていた。食具を見ているものの、「これは今食べたい食材ではない」ということを言葉で伝える姿だと言える。他のところに注意が逸れている姿や、保育者の持つ食器や食具に触れる様子についても記されていた。食材に対して興味が出てきているために、保育者の援助ではなく、自ら食材に触れてみたいという気持ちが表れていることがわかる。さらに、ゆっくりと飲み込み、食器の中を見ながら口を閉じている様子についても記されていた。嚥下をしているタイミングであるため、食器の中を見つつも食べる状態ではないことが言える。

以上のようにY児は、食べたくない思いについて次の姿を示していることが言える。『喉の水分量が足りておらず、食べ進めることが難しい』や『食具を見つつも、今食べたい食材ではないことを言葉で伝える』である。また、『自ら食材に触れてみたいと、保育者の持つ食器や食具に触れる』や『口の中に食材が入ったままであり、嚥下ができいていない』についても挙げられる。

## (3) Z児の「食べたくないという思いの表出」

最後に、Z児の表出についての記述を述べていく。まず、自ら持つ子ども用スプーンをくわえている姿や違う方向を向いている様子が記されていた。自ら持つ食具に興味を示していた場合や、保育者の援助よりも他のことに興味を示していた際に、意識が向いていなかったと考えられる。また、自ら持つスプーンで、食材を触ろうとする姿についても記述があった。自ら食具で食材を食べようとしている姿が見られるようになってきているため、保育者の援助からは食べたくないという思いがあったと言える。保育者が食材を近付けた際に、口を開けるのがゆっくりになってきている姿も記されていた。疲れが出てきたために、食べたい思いはありつつも口を開けることができにくくなってきていたと考えられる。

このようにZ児が示した食べたくない思いは、『食事に対して意識が向いていない』や『自らの食具で食材を食べようとする』である。さらに、『疲れが見られ始めて、口を開けることができにくくなる』についても挙げられる。

## (4) 3名の子どもの「食べたくないという思いの表出」

3名の子どもが示していた、「食べたくないという思いの表出」についての結果を述べる。食材に触れてみようとする姿や自ら食具で食べようとする様子が、2名の子どもに見られていた。手づかみ食べが見られ始める9か月の時期だからこそ、食材に興味を示して触れようとする姿が見られていたと考えられる。また、食材が口に入ったままの状態であるときや喉の潤い具合が不十分といった際に、保育者が口へ運ぼうとしているという、タイミングが合わない場合についても2名の子どもに見られていた。これらは、保育者の援助するタイミングに、子どもが受け入れる態勢を整えることができていなかった場面である。さらに、保育者に対して、今食べたい食材ではないことを言葉や表情で伝える姿も2名に挙げられた。これらは「食べたいという思いの表出」でも見られていたように、子どもが言葉にならない思いを示すために、9か月の子どもとしての言葉や表情で思いを表していることが言える。

口を閉じることで食べたくない思いを示す姿については、1名に挙げられていた。今は食べるタイミングではないという意味が、口を閉じることで示されていると言える。食べることから注意を逸らす姿や、食事に対して意識が向いていない様子についても、1名に見られていた。これらは、食べることに飽きている場合や、口に運ばれようとしている食材を食べる気持ちではないなど、食事に気持ちが向いていない場合に示す姿であったと考



えられる。保育者が食具を近付ける援助に対して、体を使って思いを伝える姿も1名に挙げられていた。これらは体全体に力を入れて表出することが必要となるため、食べたくないという強い気持ちが示されている姿であったと言える。

以上のように「食べたくないという思いの表出」は、3名とも一致した示し方が見られなかったものの、同じ表出していた2名の姿は次のように挙げられる。まず、子どもが食材に対して興味を示しているときや、受け入れる態勢を整えることができていない場合である。また、自分の思いを表情や言葉で示す姿についても挙げられる。3名それぞれに異なって捉えられていた表出は、今は食べるタイミングではないという意味が口を閉じることで示されている姿や、食事に気持ちが向いていない様子である。また、体を使って意思表示を示す姿についても挙げられる。

#### Ⅳ 総合考察

##### 1. 『食べる』という行為に至るために示す子どもの表出

本研究では、9か月の子どもの『食べる』という行為に至るため示した表出についての、保育者の認識を明らかにすることを目的として、「食べたいという思いの表出」と「食べたくないという思いの表出」について、10名の保育者が捉えた視点について検討した。3名の子どもが示した「食べたいという思いの表出」は、〈口を開ける姿〉〈身体的な表現〉〈咀嚼・嚥下する姿〉〈食具の取り扱い〉〈アイコンタクト〉〈食材への視線〉という6個のカテゴリと、サブカテゴリが18個生成された。また、各カテゴリについて検討した結果、合計25個の特徴が見られていた。

〈口を開ける姿〉や〈咀嚼・嚥下する姿〉、〈アイコンタクト〉においては、子どもが保育者の援助を受け入れるタイミングの重要性について挙げられていた。さらに、子どもが食材に対して興味を示しているときや受け入れる態勢を整えることができていない場合、さらには、今は食べるタイミングではないという意味が口を閉じることで示されている姿は、「食べたくないという思いの表出」として見られていることがわかった。離乳食を食べさせてもらうときに子どもが援助者の手の動きに合わせてタイミングよく口を開ける姿を、「二人羽織」のようなものと、外山（2013）は例えていた。大人の二人羽織は目隠しをした状態であるため、保育現場とはまた違った状況であるものの、受け入れる側と援助する側といった関係が生まれていることは確かである。子どもと保育者との間に親密な関係性が構築されていること

で、保育者の援助を受け入れて『食べる』という子どもの行為が成り立っていると言える。

自分の思いを表情や言葉で示す姿が、「食べたいという思いの表出」と「食べたくないという思いの表出」の両方に見られていた。また、援助した保育者和其他の1名の保育者は、子どもと視線を合わせながら関わり合うことに着目していた。9か月の子どもの食事時間は、一方的に保育者が子どもに対して食材を与えるという時間ではなく、優しいまなざしがお互いに行き交う重要な保育時間である。そのため、子どもの身体的な姿だけを見て援助をするのではなく、子どもの視線や表情に着目しておかなければ、子どもの表出を理解できないことを示唆している。最低限保障されるべき「保育の質」を伝えることによる保育者の行動変化についての調査では、食事の介助をする子どもの数が増えるにつれて、介入効果が低くなる効果がみられている（高木ら、2018）。保育施設によっては、一対一で食事を進めることのできない場合があると考えられ、保育者が食事を食べさせなければならないという使命感にとらわれてしまう可能性がある。そういった場合には、ただ食材を食べさせるという、いわゆるフィーディングになってしまい、視線による表出を見逃してしまうことが考えられる。子どもと視線を合わせながら一回一回の援助を丁寧に行い、気持ちを通い合わせて食事を進めることで、『食べる』という行為に繋がると言える。

〈食具の取り扱い〉では、子どもが自ら食具を手にとることに対して「食べたいという思いの表出」だと捉えつつも、保育者によって着目する姿はそれぞれの視点がかった。また、『自ら食べ進めるため、保育者の持つ食具に手を添える姿』や『自ら持つ食具を使って食べようとする姿』といった特徴が挙げられていた。これらは、保育者と一緒に食具を持って食事を進めることのできる段階に成長しつつある子どもの姿だと言える。根津（2010）は、乳児が文化様式であるスプーンを使った行動を獲得することと、乳児の食べることについての「主体性」の獲得とは、不可分の関係であることを述べていた。つまり9か月においては、子どもが主体的に食事を進めるための成長段階として、「使える」「使えない」に関らず食具に触れる機会を設けることが重要である。しかし成長段階であるため、取り扱いに対して十分に配慮することや強制して使用させないことを忘れてはいけない。食具が玩具とならないように、どのように興味を示しているのかということを読み取り、食事を進める上で食具をどのように扱っているのかを把握するなど、今の子どもの発達や気持ちを理解することが必要である。

## 2. 保育者の認識

保育者個人が考える「食べたいという思いの表出」の内容については、様々な捉え方があった。また、同じサブカテゴリであっても、保育者が着目している姿については、それぞれの視点があることがわかった。しかし、見るべき行動や回答の手続きの説明に不備があり、子どもの表出について記述されなかったために、うまく捉えることができなかった可能性も指摘できる。また、今回は10名の保育者が記した内容についての聞き取りを行っていないため、保育者がどのような意図で行動を読み取っていたのかについては明らかにすることができない。しかし今回の結果からは、子どもの「食べたいという思いの表出」については、保育者全員に同じ視点で捉えられていない可能性があったと考えられる。子どもの主体性の表れやペースは一人ひとり異なるものであり、食事場面での「子どもの心地よさ」を支える、もしくは脅かす要因も違うため（淀川ら、2022）、脇田ら（2011）が述べた、子どもの意思や発達を理解し、子どもの気持ちや行動に対応した母親の行動をとることの重要性は、保育者にも求められている。

今回「食べたくないという思い」については、Z児の食事援助を継続して担当している保育者による視点について検討した。日頃援助を行っていない保育者との関わり合いであったため、X児とY児の食事場面については、「食べたくないという思い」を十分に表出できていなかったことも考えられる。毎日関わっている信頼できる保育者だからこそ、子どもが思いを表出することのできる場面や、毎日援助している保育者だからこそ捉えられる瞬間がある。また、「食べたくないという思い」を示した際に、どうすれば食べることに繋がるのか、もしくはその思いを受け入れながら食事を終えるなどの対応もできると言える。すなわち、安心できる存在である保育者が食事場面において継続的に関わることで、子どもの思いを適切に、応答的に汲み取ることが可能となると考えられる。しかし、保育者個人が過ごしていた生活経験や保育経験の中で関わってきた子どもの質によって、保育者自身の保育に対する考え方や子どもの見方、子どもの姿の捉え方が違ってくことは確かである。そのため、保育者が捉えた子どもの思いについての受け止めやその理解が画一的にならないように、多面的な見方から理解を深めることができるよう、日常的に他の保育者と子ども理解について意見交換を行い、妥当性と信頼性を高めることが重要である（文部科学省、2019）。特に言葉で気持ちを伝えることが難しい0歳の子どものみだからこそ、食事場面におけるありのままの姿を理解するためには、保育者の認識が偏ったものにならないように、複数

の保育者が捉えた視点を重ね合わせて常に問い直し、考え方をアップデートすることが必要である。

## 3. 今後の課題

本研究では、9か月の子どもの対象として調査したが、1人の保育者が3名に対して援助を行った限定的な食事場面であった。調査対象児や援助を行う保育者を増やすことや、継続して同じ保育者から援助を受けている子どもを対象とするなど、調査対象者や観察場面を広げたデータを用いることで、新たなカテゴリや特徴について明らかにすることができると考えられる。また、重複した内容が40%以上あったことは、調査対象者に本研究の意図がうまく伝わっていなかった可能性も考えられる。それぞれの保育者が記した記述内容が同じ場合であっても、異なる意味合いが含まれていることも考えられるため、保育者が捉えた表出の理由に関する解釈についても検討する必要がある。9か月の子どもは手づかみ食べが始まりつつある時期であるが、今回の事例では手づかみ食べを行う子どもはいなかった。そのため、手づかみ食べを行いつつ、保育者から援助を受けている場面についても検討することで、9か月の子どもの『食べる』という行為に関する子ども理解が深まると言える。今回は援助を行った保育者のみに「食べたくないという思いの表出」についての記述をしていただいた。先行研究において河原（2009）は、子どもが保育者からの援助を拒否するのは、相対的に9か月時で多く見られていたことを明らかにしているため、食事を進める上で拒否を示している子どもの表出の捉え方についても観察場面を広げる必要がある。そして、調査対象者が記した記述の数については分析しておらず、有意差に関しては明らかにすることができていない。そのため、保育者の捉え方の差についての分析に関しては、今後の課題とする。

## 文献

- 遠藤純子・小野友紀・池谷真梨子（2018）.「乳児保育」における食事援助の学びについての検討：Eating-Feeding 相互模擬演習を体験した学生の気づきから 学苑（昭和女子大学学苑）初等教育学科紀要, 932, 17-27.
- 遠藤純子・小野友紀・池谷真梨子（2019）. 離乳期における保育者の援助特性に関する一考察－自食移行期の言語的調整と身体的調整に着目した事例的検討－ 学苑（昭和女子大学学苑）初等教育学科紀要, 944, 2-18.
- 「授乳・離乳の支援ガイド」改訂に関する研究会（2019）. 授乳・離乳の支援ガイド, 30-31.
- 河原紀子（2009）. 保育園における乳幼児の食行動の発達と自律 乳幼児医学・心理学研究, 18(2), 125-126.
- 川中義博（2023）. 0歳児クラスの食事場面における行為分析

ー保育者との関わり合いに着目してー 大阪総合保育大学紀要, 17, 79-101.

厚生労働省 (2017). 保育所保育指針 フレーベル館.

厚生労働省 (2018). 保育所保育指針解説 フレーベル館.

厚生労働省雇用均等・児童家庭局 (2004). 楽しく食べる子どもに～食からはじまる健やかガイド～ フレーベル館, 13.

水野雅之 (2019). 表出 谷田貝公昭 (編) 改訂新版保育用語辞典 一藝社, 336.

文部科学省 (2019). 幼児理解に基づいた評価 チャイルド本社, 51-59.

内閣府・文部科学省・厚生労働省 (2017). 幼保連携型認定こども園教育・保育要領 フレーベル館.

根津明子 (2009). 「離乳食介助場面」における子どもの「主導性」の発揮ー食事場面における保育者と子どもの「相互交渉」を通して 東横学園女子短期大学紀要, 43, 85-98.

根津明子 (2010). 乳児において文化としての「食べる」行為はいかにして成立するかー離乳食援助場面を通してー 日本教育方法学会紀要 教育方法学研究, 35 巻, 47-57.

野澤祥子・淀川裕美・高橋翠・遠藤利彦・秋田喜代美 (2017). 乳児保育の質に関する研究の動向と展望 東京大学大学院教育学研究科紀要, 56, 399-419.

大方美香 (2023). 乳児保育における先行研究レビュー 大阪総合保育大学児童保育論集, 2, 75-90.

塩谷香 (2020). 乳児保育における保育方法の検討 國學院大學人間開発学研究, 第11号, 97-106.

高木早智子・掛札逸美・田中浩二・酒井初恵・浅川弘子 (2018).

家庭保育との比較性から見た保育の観察に関する研究 (2) 保育科学研究, 第9巻, 107-114.

外山紀子 (2013). 離乳食場面における乳児と母親の相互調整: 視線を手がかりとした分析 人工知能学会全国大会論文集, 27, 1-4.

脇田満里子・野村幸子 (2011). 離乳食場面における母と子の相互交渉の経時的変化 奈良看護紀要, 第7巻, 16-23.

淀川裕実・酒井治子・林薫・志賀口大輔・渡邊貴幸・曾退友美・池谷真梨子・伊藤優 (2020). 低年齢児の食事場面での保育者の援助と環境構成に関する研究 保育科学研究, 第10巻, 46-66.

淀川裕実・酒井治子・林薫・志賀口大輔・渡邊貴幸・曾退友美・池谷真梨子・伊藤優 (2022). 乳児期の食事場面における子どもの心地よさを支えるための要因に関する研究ー子どもと保育者の関係性構築のプロセスに着目して 保育科学研究, 第11巻, 31-52.

## 謝辞

本論文を執筆するにあたり、調査にご協力くださいました10名の保育者の皆様に、深く感謝申し上げます。

## 付記

本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

# The Act of the Meal Scene of the 0 Years Old Children : Focusing on the Perspective of the Nursery Teacher

Yoshihiro Kawanaka

*Osaka University of Comprehensive Children Education Graduate School*

In this study, we aimed to explore the eating behaviors of three 9-month-old children in a daycare center, focusing on how caregivers perceive their “expression of desire to eat” and “expression of lack of desire to eat”. We identified a total of six categories and 18 subcategories, observing 25 distinct features.

In the categories of “Opening the mouth,” “Chewing and swallowing,” and “Eye contact,” we found that the timing at which children accepted assistance from caregivers was of utmost importance. When a child displayed interest in food or when the conditions for accepting it were not met, closing the mouth was observed as an “expression of lack of desire to eat,” indicating that it is not the right timing for eating at that moment. Furthermore, caregivers who provided assistance and others were attentive to engaging with the child while making eye contact. Children conveyed their thoughts and feelings through facial expressions and words, encompassing both the “expression of the desire to eat” and the “expression of the lack of desire to eat”. In the category of “handling of eating utensils,” the act of children picking up eating utensils by themselves was viewed as “an expression of the desire to eat”. However, each caregiver had their own perspective on what to emphasize in this context. Furthermore, providing opportunities for children to interact with eating utensils, regardless of whether they “can” or “cannot” use them, was considered vital for their independent development in promoting self-feeding.

**Key words** : infant care, baby food, physical expression, perspective of nursery teachers,  
support for eating